

ルーン石碑からみたスカンディナヴィア世界と東方世界の交渉*

小澤 実

1. スカンディナヴィア世界と東方
2. ルーン石碑と「東方」
3. スカンディナヴィア人にとってのロシア
4. おわりに

資料

地図1：ヨーロッパにおけるイスラーム貨幣の出土状況

地図2：ルーン石碑に記録された東方世界の地名

1. スカンディナヴィア世界と東方

19世紀以来、北欧の研究者集団は、スカンディナヴィア世界とバルト海の東方にあるロシアとの関係について、ある一定の見解が堅持してきた。すなわちロシアを建国したのはスカンディナヴィア人であり、ノヴゴロドそしてキエフを中心としてスカンディナヴィア人人の世界がバルト海の東方に広く展開していたのだとする理解である¹。その根拠は大きく二つある。ひとつは文献史学の分野からのものであり、ロシア最古の文献記録である12世紀の『過ぎし歳月の物語』（『原初年代記』／『ネストル年代記』）に記録される、

* 本研究は、平成21年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究B）（研究題目：ルーン石碑の社会的機能に関する基礎的研究）ならびに平成21年度笹川科学研究助成金（研究題目：紀元千年前後北ヨーロッパにおける、スカンディナヴィア人の船舶利用に関する社会史的研究）の成果報告の一部である

¹ スカンディナヴィア人と東方世界との関係を論じた最新の総合記述は、W. Duczko, *Viking Rus. Studies on the presence of Scandinavians in eastern Europe* (The Northern World 12). Leiden 2004. だが、以下の研究もなお基本である。E. A. Melnikova, *The eastern world of the Vikings. Eight essays about Scandinavia and eastern Europe in the early middle ages* (Gothenburg Old Norse Studies 1). Göteborg 1996; H. Arbman, *Svear i österviking*. Stockholm 1955; S. H. Cross, “The Scandinavian infiltration into early Russia,” *Speculum* 21 (1946), pp. 505-514; T. J. Arne, *La Suède et l'Orient*. Uppsala 1914. 東方世界とスカンディナヴィアの関係論を論じている邦語文献は、角谷英則『ヴァイキング時代』（諸文明の起源9）（京都大学学術出版会 2006年）。

862 年の北欧人リューリクのノヴゴロド公としての招致である。該当箇所を引用しておきたい。

…彼らは互いに「私たちを統治し、法によって裁くような公を、自分たちのために探し求めよう」と言い合った。彼らは海の向こう、ヴァリャギのルシのもとに行った。このようにそのヴァリャギは自らをルシと呼んでいたからである。…そこで三人の兄弟が自分たちの氏族とともに選び出され。ルシのすべてを連れて到着した。長兄リューリクは [ノヴゴロド] に、次のシネウスはベロオゼロに、三番目のトルヴォルはイズボルスクにそれぞれ [座した]。これらの者から、ルシの国が呼び名を得たのである²。

当該箇所においては、リューリク以下、キエフ・ルーシの初期支配者の名前がスカンディナヴィア起源であるという事実もまた注目された。それは北欧の歴史家たちに、ロシアの初期史がスカンディナヴィア史の一部であることをよりいっそう信じさせる役割を果たした。

もうひとつは、スウェーデンのメーラレン湖に浮かぶ交易地ビルカの発掘である。長期にわたる発掘により確認された東方世界からの産品やイスラームのディルハム貨は、ビルカが東方世界への北欧側の窓口であり、ビルカを基点として北欧世界とロシア、ビザンツ、イスラームといった東方世界がつながっていたとする理解を一層深めることになった³。

以上の見解は、当然の事ながらロシア人研究者の強い反発を招いた。つまり、『過ぎし歳月の物語』で描かれる北欧人招致によるキエフ・ルーシの建国はあやまりであり、その後の社会発展の度合いから考える限り、ルーシ国家をつくりあげたのはあくまでスラブ人であるとする見解である。北欧側とロシア側によるキエフ・ルーシ建国問題をめぐる見解の対立は、記述史料の貧しさに加えて、民族イデオロギーという歴史学研究とは別の

² 國本哲男他訳『ロシア原初年代記』（名古屋大学出版会 1987年）、19頁、6370（862）年。

³ ビルカについての研究は膨大であるが、さしあたり B. Ambrosiani, “Birka,” in: S. Brink (ed.), *The Viking world*. London 2008, pp. 94-100; 角谷英則「ビルカの史的役割 ヴァイキング時代のスウェーデン・ロシア関係」『環バルト海研究会第4回現地調査報告書』（豊田工業大学 2005年）、45-54頁。ただしビルカの成立以前より、スウェーデンと東方世界との関係は確立していた。

要因もあり、大変熱を帯びた論争となった。両者の対立は通常ノルマニスト・スラビスト論争として近代史学史上に記憶されている⁴。史学史という観点からはまことに興味深い論争であるが、歴史学という観点からは、文献史料に対し徹底したサーヴェイを施したことを除けば、生産的であったとは必ずしもいえない。

膠着状態にあった研究現状を変化させたのは、文献史学ではない三つの研究分野である。ひとつはロシアの考古学である。戦後、ロシアにおいては9世紀から11世紀にかけての都市的集落の発掘が相次いだ。もっとも大規模なものはラドガ湖畔のスタラヤ・ラドガの発掘である⁵。そのみならず、ノヴゴロド近郊のゴロディシチ⁶、スモレンスクの前身であるグネズドヴォ⁷、そしてチェルニゴフといった、北海から黒海を結ぶヴォルコフ川からドニエプル川にかけての河川ラインに点在する都市的集落が、つぎつぎと発掘対象となった⁸。いずれの集落からもスカンディナヴィア人の存在を示唆する遺物が発見されたし⁹。とりわけイングマール・ヤンソンの研究が示すように、スカンディナヴィア起源の女性用ブローチは広範囲にわたって分布している¹⁰。それにくわえて、10世紀アッバース朝の外交使節イブン・ファドラーンの『旅行記』にその詳細が記されているスカンディナヴィア人特有の埋葬形式である船葬墓も、ロシア全体で20以上確認されている¹¹。

⁴ この論争の背景を簡潔にまとめているのは、田中陽児他『ロシア史1』（山川出版社 1995年）、37-39頁。

⁵ ラドガ湖周辺の歴史に関する最新の研究は、J. Korpela, *The world of Ladoga. Society, trade, transformation and state building in the eastern Fennoscandian boreal forest zone c. 1000-1555*. Kiel 2008.

⁶ ノヴゴロドの発掘成果について、今村栄一「都市ノヴゴロドの成立 最近の考古学研究を中心に」『ロシア史研究』75号（2004年）、74-84頁。

⁷ D. A. Avdusin, “Smolensk and the Varangians according to the archaeological data,” *Norwegian Archaeological Review* 2 (1969), pp. 52-62.

⁸ F. Androshchuk, “The Vikings in the east,” in: Brink (ed.), *The Viking world*, pp. 517-42; M. Kazanski et alii (eds.), *Les centres proto-urbains russes entre Scandinavie, Byzance et Orient. Actes du colloque international tenu au Collège de France en octobre 1997* (Realités byzantines 7). Paris 2000.

⁹ たとえば、O. Davidan, “Kunsthandwerkliche Gegenstände des 8. bis 10. Jahrhunderts aus Alt-Ladoga (Die Sammlung der Staatlichen Ermitage in St. Petersburg),” *Zeitschrift für Archäologie des Mittelalters* 20 (1993), pp. 5-61; H. Arbman, “Skandinavische Handwerk in Russland in der Wikingerzeit,” *Meddelanden från Lunds universitets historiska museum* 1959 (1960), pp. 110-135.

¹⁰ I. Jansson, “Communications between Scandinavia and eastern Europe in the Viking Age. The archaeological evidence,” in: Klaus Düwel et alii (eds.), *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel- und Nordeuropa, Teil IV: Der Handel der Karolinger und Wikingerzeit*, Göttingen 1987, pp. 773-803, esp. 777.

¹¹ イブン・ファドラーンのテキストは、イブン・ファドラーン（家島彦一訳注）『ヴォルガ・ブルガール旅行記』（東洋文庫）（平凡社 2009年）、第4章「ルース人について」

二つ目は古銭学である。北欧には 780 年代よりディルハム貨幣が大量に流入した。イスラーム世界とヨーロッパ世界の中継点としてのスカンディナヴィアという見方は、いわゆるピレンヌ学説を批判するスウェーデンの古銭学者スチューレ・ボリーンによる 1939 年のスウェーデン語論文に基づいている¹²。その後、ヨーロッパにおけるディルハム貨の研究は進展を見せ、その成果を十分に活用したイングマール・ヤンションやトマス・ヌーナンの包括的な研究によれば、バグダード周辺で生産されたディルハム貨が、コーカサス地方からロシアをへてバルト海に達し、ビルカを中心に北欧に広がり、それがさらに北ヨーロッパ世界に持ち込まれたことがわかっている¹³。この貨幣の入手手段が、略奪によるものか、俸給によるものか、奴隷や毛皮の売買によるものかここでは問わないが¹⁴、ヤンソンの論文に付された発見ディルハム貨の分布地図を目にするならば、中継地点としてのスカンディナヴィア世界のもつ経済地理的意義が一目瞭然である（地図 1）¹⁵。

三つ目は言語学である。すでに述べたように、『過ぎし歳月の物語』に記録されるリューリク以下の初期ルーシ国家支配者の名前が北欧起源であることは、デンマークの文献学者ヴィルヘルム・トムセンの著名な講演以来知られていた¹⁶。それに加えて、ロシア語における一定の単語も北欧起源であることが歴史言語学者の研究により明らかとなってきた¹⁷。語彙のみならず北欧特有のルーン文字の利用も証明されている。1914 年にはドニ

を参照。ロシア諸国家で発見された船葬墓に関しては、A. Stalsberg, “Scandinavian Viking-Age boat graves in Old Rus,” *Russian History / Histoire russe* 28 (2008), pp. 359-401.

¹² 1939 年にスウェーデン語原著が、1951 年に *Scandinavian Journal of History* に英語訳が刊行された。英語訳に基づく邦訳もある。S・ボーリン「マホメット、シャルルマーニュ、及びリューリク」H・ピレンヌ他（佐々木克巳編訳）『古代から中世へ ピレンヌ学説とその検討』（創文社 1975）、133-85 頁。

¹³ ヌーナンの業績は多数にのぼるが、とりわけロシアの政治地理学的位置を強調した論考として、T. S. Noonan, “Why dirhams first reached Russia: the role of Arab-Khazar relations in the development of the earliest Islamic trade with eastern Europe,” *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 4 (1984), pp. 151-282.

¹⁴ I. Jansson, “Warfare, trade, or colonization? Some general remarks on the eastern expansion of the Scandinavians in the Viking period,” in: Pär Hansson (ed.), *The Rural Viking in Russia and Sweden*, Örebro 1997, pp. 9-64.

¹⁵ I. Jansson, “Wikingerzeitlicher orientalischer Import in Skandinavien,” in: *Oldenburg – Wolin – Staraja Ladoga – Novgorod – Kiev. Handel und Handelsverbindungen im südlichen und östlichen Ostseeraum während des frühen Mittelalters* (Bericht der römisch-germanischen Kommission 69). Mainz 1988, p. 571. 近年刊行が予定されている次のカタログは決定的な情報となることが予想される。T. S. Noonan (ed.), *Catalogue of finds of Islamic coins in northern and eastern Europe*. Stockholm, forthcoming.

¹⁶ V. Thomsen, *The relations between ancient Russia and Scandinavia and the origin of the Russian state. Three lectures*. Oxford & London 1877.

¹⁷ 代表的な語彙研究として、G. Schramm, *Altrusslands Anfang. Historische Schlüsse aus Namen*,

エプル川が黒海に注ぎ込むその河口に浮かぶベレザン島でルーン石碑が発見されているし¹⁸、ロシアにおいてもルーン文字が刻まれた遺物が発見されている¹⁹。そのような素材を基にして、エレーナ・メルニコヴァやサイモン・フランクリンはロシア初期史におけるルーン文字のリテラシーを論じた²⁰。

いずれにせよ、以上の研究成果が語るどころにしたがえば、9世紀から11世紀にかけての北西ユーラシア世界においてスカンディナヴィア人が存在したことは紛れもない事実であり、また彼らがロシア国家の生成プロセスにおいて相応の歴史的役割を果たしていたこともほぼ間違いないといつて良い。

それではここでルーン国家はやはりスカンディナヴィア人によって建設された国家であるのかと言う、かつて激しい論争を引き起こした問いに立ち戻ってみたい。この問いの問題点は、まず、国家建設の担い手がスラブ人かスカンディナヴィア人かという二者択一的な問いのたて方をしている点にある。おなじくスカンディナヴィア人の国家建設として引き合いに出されるイングランド北部のデーノローやノルマンディについても同じことが言えるが、海外に入植したスカンディナヴィア人の絶対数は、本来その地域に定住していた人間よりも多くはない²¹。たしかにスカンディナヴィア人が多数を占める集落はあったかもしれないし、都市建設に際してはひょっとすると少数派のスカンディナヴィア人

Wörtern und Texten zum 9. und 10. Jahrhundert (Rombach Wissenschaften, Reihe historiae 12) . Freiburg im Breisgau 2002; J. Forssman, *Skandinavische Spuren in der altrussischen Sprache und Dichtung* (Münchener Studien zur Sprachwissenschaft) . 2 Aufl. München 1984; C. Thörnqvist, *Studien über die nordischen Lehnwörter im Russischen*. Uppsala-Stockholm 1948. 地名研究として T. N. Djakson, *Austr í Görðum. Drevnerusskie toponimy v drevneskandinavskikh istochnikakh*. Moskva 2001.

¹⁸ ベレザン石碑について、T. J. Arne, “Den svenska runstenen från ön Berezan utanför Dnjeprmyningen,” *Fornvännen* (1914) , pp. 44-48. テクストは、**kurani : kerpi : (h)alf : þisi : iftiR : kal : fi:laka : si(n)** (訳：グラニーは、仲間であるカールを記念してこの柱を建てた)

¹⁹ カタログとしての役割をもつのは、Duczko, *The Vikings Rus*.

²⁰ E. A. Melnikova, “The cultural assimilation of the Varangians in eastern Europe from the point of view of language and literacy,” in: W. Heizmann & A. van Nahl (eds.) , *Runica - Germanica - Mediaevalia*, Berlin & New York, 2003, pp. 454-465; Ead. “Runic inscriptions as a source from the relation of northern and eastern Europe in the middle ages,” in: Klaus Düwel (ed.) , *Runeninschriften als Quellen interdisziplinärer Forschung. Abhandlungen des Vierten Internationalen Symposiums über Runen und Runeninschriften in Göttingen vom 4.-9. August 1995*, Berlin-New York 1998, pp. 647-659; S. Franklin, *Writing, society and culture in early Rus, c.950-1300*, Cambridge 2002, pp. 110-115.

²¹ 比較対象としてのデーノローについての研究動向は、D. M. Hadley, “Viking and native: re-thinking identity in the Danelaw.” *Early Medieval Europe* 11 (2002) , pp. 45-70. ノルマンディに関しては、P. Bauduin, *La première Normandie, X^e-XI^e: sur les frontières de la Haute-Normandie, identité et construction d'une principauté*. Caen 2004.

がイニシアチブを取ったかもしれない。しかしながら、彼ら新参入植者は、おそらくはその土地で力を持つ有力者家系の一部を占めていたに過ぎない。すでに指摘した住民構成という要素を考え合わせると、先住スラブ人を排除したかたちでのスカンディナヴィア人による国家建設——ここでいう国家建設とは都市建設と貢納地域の拡大——というモデルはなりたたないことが予想される。

ここでもうひとつ大きな問題が提起される。これまでわたしたちはスカンディナヴィア人（スウェーデン人）というエトノスの存在を前提として議論してきた。しかしながら9世紀半ばから11世紀半ばという200年にわたるタイムスパンにおいて、「スカンディナヴィア人」というエトノスの内実が不変であったと考えることは難しい。『過ぎし歳月の物語』によれば、スカンディナヴィア人の入植は860年代に始まっている。すでに確認したように、彼らがスカンディナヴィア本土、おそらくスウェーデンのメーラレン湖周辺の文化をロシアに持ち込んだことはほぼ間違いない。しかしながらスカンディナヴィア固有の文化はいったんロシアという異なる文化空間に持ち込まれると、時間の経過にしたがって変化の波を被ることになる。たとえばイブン・ファドラーンの記述を微細に読み解けば、古スカンディナヴィア文化を代表する船葬墓すらも、ロシアの地においては現地とは異なる姿になりつつあったことがわかる²²。パトリック・ギアリが正しくも論じたように、中世においてもエトノスというのは、超時間的な固定したものではなく歴史変化のさまざまな諸要素にしたがって内実を変化させるものである²³。ロシア国家や文化の建設の担い手が「スカンディナヴィア人」か「スラブ人」かという二者択一的な設問は、この点においても間違っているとと言える²⁴。

²² 詳細は、小澤実「イブン・ファドラーンの視線 10世紀北西ユーラシア史の中のスカンディナヴィア系集団」『中央評論』266号（特集：越境する西洋中世）（2009年）、21-28頁を参照。船葬墓についての一般的な情報とカタログは、M. Müller-Wille, “Bestattung im Boot. Studien zu einer nordeuropäischen Grabsitte,” *Offa* 25-26 (1970), pp. 1-203.

²³ パトリック・ギアリ（鈴木道也他訳）『ネイションという神話 ヨーロッパ諸国家の中世的起源』（白水社 2007年）。

²⁴ エトノジェネシスという観点から『過ぎし歳月の物語』を読み解くのは、O. P. Tolochko, “The *Primary Chronicle*’s ‘ethnography’ revisited: Slavs and Varangians in the middle Dnieper region and the origin of the Rus’ state,” in: I. H. Garipzanov, P. J. Geary & P. Urbanczyk (eds.), *Franks, Northmen, and Slavs. Identities and state formation in early medieval Europe*. Turnhout 2008, pp. 169-188.

2. ルーン石碑と「東方」

ここで歴史研究の基礎となる史料の問題に踏み込んでみたい。従来、ロシアの国家建設を中心としたスカンディナヴィア人とロシアとの関係は、相対的に記述量の多い文献史料、すなわち『過ぎし歳月の物語』を基幹史料として進められてきた²⁵。12世紀に最初の編纂がなされたと思われるこのテキストの史料的价值は、徹底した文献学的考証をへて、必ずしも低いものではないと考えられている。カロリング経験を経た西ヨーロッパ中核諸国と異なり、国王証書や所領明細帳といった客観性の高い史料のないロシア初期史において、『過ぎし歳月の物語』は今後とも基本史料としての地位が揺らぐことはないと思われる²⁶。とはいえ、とりわけリューリクの招致を記した初期史の部分は、相互補完する資料もほとんどないため、いまなお扱いの難しい部分として理解されているし、それゆえにかつて歴史学的に不毛ともいえる論争を引き起こしたことは、すでに確認した通りである。

しかしながらいったんロシアを離れ、北欧側に目を向けてみるならば、ロシアとスカンディナヴィア世界の関係を証言する同時代史料が伝来している²⁷。そうした史料のひとつにルーン石碑があげられる。ルーン石碑とはルーン文字という北ゲルマン世界特有の文字が刻まれた石碑であり、死者の記念を目的とするものがほとんどを占める²⁸。スカンディナヴィア全体で三千基ほどが伝来しており——現在も毎年のように発見されている——、そのうち百ほどの石碑にロシアを含めたバルト海より東方の世界との関係をしめす文言を確認することができる²⁹。残念ながら、デンマークのイエリング石碑のようにテク

²⁵ ロシア初期史に関する基本的文献として以下を参照。O. P. Tolochko, “Kievan Rus around the year 1000,” in: P. Urbanczyk (ed.), *Europe around the year 1000*. Warszawa 2001, pp.123-139; T. S. Noonan, “European Russia, c.500-c.1050,” in: T. Reuter (ed.), *The New Cambridge Medieval History*, vol. III. Cambridge 1999, pp. 487-513; S. Franklin & J. Shepard, *The emergence of Rus, 700-1200*. Harlow 1996; H. Rüss, “Das Reich von Kiev,” in: M. Hellmann (ed.), *Handbuch der Geschichte Russlands*. Bd.1: *Bis 1613. Von der kiever Reichsbildung bis zum moskauer Zartum*. Stuttgart 1981, pp. 199-429; 田中陽児編『ロシア史1』(山川出版社 1995年)、第1章と第2章。

²⁶ 『過ぎし歳月の物語』の文献学的研究は膨大であるが、次の手引きが包括的である。R. Müller (ed.), *Handbuch zur Nestorchronik*, now 4 vols. München 1978-

²⁷ 包括的な史料研究はなお F. Braun, “Das historische Russland im nordischen Schrifttum des 10. bis 14. Jahrhundert,” in: *Festschrift Eugen Mogk*. Halle am Saale 1924, pp. 150-196.

²⁸ ルーンについての一般的な情報は、K. Düwel, *Runenkunde* (Sammlung Metzler 72) . 4 Aufl. Stuttgart 2007; E. Moltke, *Runes and their origins: Denmark and elsewhere*. København 1985; L. Musset, *Introduction à la runologie*. Paris 1965.

²⁹ ルーン石碑への歴史学的アプローチについて、M. Ozawa, “Rune stones create a political landscape: Towards a methodology for the application of runology to Scandinavian political history in the late Viking Age,” *HERSETEC: Journal of hermeneutic study and education of textual configuration* 1-1 (2007), pp. 43-62 & 2-1 (2008), pp. 65-85; B. Sawyer, *The Viking-Age*

スト部分に歴史的イベントと関わる内容を記していない限り、石碑の建立年代を正確に確定することはできない³⁰。しかしながらとりわけスウェーデンの場合は石碑の文様様式から相対年代を導き出すことは可能であるし、キリスト教の導入を示す十字架が彫られているかどうか年代決定のひとつの指標となる³¹。そのような条件を考慮した場合、東方に関する石碑はそのほとんどが 11 世紀のものであると考えられる。

東方世界との関係をしめす石碑は、スウェーデンに集中している。デンマークとノルウェーにはそれぞれ 1 件であるのに対し、スウェーデンには 107 件が確認できる³²。さらに言えば、スウェーデンの場合、スウェーデン全土に均一に分布しているわけではなく、ウップランドとスーデルマンランドというメーラレン湖周辺の地域に集中的に建立されている。ビルカヤングトゥーナといったスヴェーア王権の拠点を抑えたこの地域に東方との関係をしめす石碑が集中していることは、政治権力と東方との関係を理解するにあたって極めて示唆的である。

さて、これまで東方世界という一般的な言い方をしてきたが、もう少し具体的にルーン石碑に記される地名を見ていきたい。東方世界をかりにスカンディナヴィア世界よりバルト海以東の世界であると定義するならば、その空間はバルト海からロシア、ロシアからビザンツ、ビザンツからイスラーム世界を包接する広大な空間となる。この空間をメルニコヴァが作成した地図をもとに確認してみたい（地図 2）。まずはバルト海周辺に、現

rune-stones. Custom and commemoration in early medieval Scandinavia. Oxford 2000; R. Palm, *Runor och regionalitet. Studier av variation i de nordiska minnesinskrifterna* (Runrön 7) . Uppsala 1992.

³⁰ ルーン石碑を代表するデンマークのイエリング石碑については、小澤実「ルーン石碑と対話する イエリングの二つのルーン石碑」『歴史と地理 世界史の研究』219号（2009年）、53-56頁。

³¹ スカンディナヴィア世界とキリスト教の接触はカロリング時代にさかのぼるが、生活信仰として社会に浸透するのはデンマークやノルウェーで 10 世紀後半、スウェーデンでは 11 世紀前半を想定すべきであろう。スカンディナヴィアのキリスト教化問題について、N. Berend (ed.) , *Christianization and the Rise of Christian Monarchy. Scandinavia, Central Europe and Rus' c. 900-1200*, Cambridge 2007; Jón V. Sigurðsson, *Kristninga i Norden 750-1200*, Oslo 2003; L. Abrams, "Eleventh-century missions and the early stages of ecclesiastical organization in Scandinavia," *Anglo-Norman Studies* 17 (1994) , pp. 21-40.

³² 東方世界のルーン石碑を論じた研究として、J. Jesch, *Ships and men in the late Viking Age: The vocabulary of runic inscriptions and skaldic verse.* Woodbridge 2001; E. A. Melnikova, *Skandinavskie runicheskie nadpisi. Novye nakhodki i interpretatsii.* Moskva 2001; M. G. Larsson, *Runstenar och utlandsfärder: Aspekter på det senvikingatida samhället med utgångspunkt i de fasta fornlämningarna* (Acta Archaeologica Lundensia s. in 8, 18) . Stockholm 1990; O. Pritsak, *The origin of Rus' I: Old Scandinavian sources other than the sagas.* Cambridge, Mass. 1981, pp. 305-463; A. Ruprecht, *Die ausgehende Wikingerzeit im Lichte der Runeninschriften.* Göttingen 1958.

在のバルト三国やフィンランドとおもわれる地名を確認することができる。さらにバルト海と東方世界をつなぐラドガ湖のかなたに、「ガルザル」とよばれるロシアを確認することができる。そして「ギリシア」と呼ばれるビザンツ帝国がある。さらにその先に広がり、おそらくイスラーム世界と思われる「セルクランド（絹の地）」がある。こうした地名の広がり、紀元千年前後のスカンディナヴィア人の空間認識を反映している³³。

東方に関するルーン石碑は、大きく分けて二つのタイプがある。ひとつはいま確認した具体的な地名の挙げられた石碑であるが、もうひとつはただ「東方 austr」とだけ記された石碑である。すでに確認したようにルーン石碑は死者を記念するための石碑であり、記念されるべき死者の関係者が建立している。したがって石碑に記されている情報は、建立者が被建立者より直接的もしくは間接的に獲得したものである。具体的な地名が挙げられている場合はどこで何があったのか比較的詳細な情報が得られていた、ただ「東方」とのみ記されている場合は、建立者が曖昧な情報しか得ていなかったと考えてよい。一例を挙げてみたい。ウステルヨーランドのヴェステル・ステンビー教会にある石碑（Ög8）である。

スティグは、息子エイヴィンドを記念してこの記念碑を作った。彼は東方で死んだ。³⁴

しかしながら、ただ「東方」とだけ記されたルーン石碑が大量に伝来しているという事実それ自体には、大きな意味があるとわたしは考えている。つまり、紀元千年前後のスカンディナヴィア人にとって、「東方」を訪れたという経験が、スカンディナヴィア世界の中で大いなる名誉として認識されていたということである。西ヨーロッパ世界や地中海世界で日常的に利用されていた羊皮紙媒体と異なり、石碑に刻むことができる情報は多くない。それにもかかわらずルーン石碑の建立者が、被建立者が「東方」を訪れたという曖昧な情報を石碑の少ないスペースの中にわざわざ刻ませるのは、「東方」という地名が特別な意味合いを同時代のスカンディナヴィア人に与えていたからに他ならない。

³³ 外国人のスカンディナヴィア認識の研究に比べ、スカンディナヴィア人の空間認識の研究は少ない。T. N. Jackson, “Ways on the 'mental map' of medieval Scandinavians,” in: W. Heizmann et alii (eds.), *Analecta Septentrionalia. Beiträge zur nordgermanischen Kultur - und Literaturgeschichte*, Berlin - New York 2009, pp. 211-220.

³⁴ Ög8: **stikur karþi juþl þau aft auint sunu sin sa fial austr**

それでは彼らにとって「東方」とは何を意味していたのだろうか。東方石碑の多くがキリスト教のシンボルである十字架を刻んでいる³⁵。そうしたキリスト教スカンディナヴィア人にとって、「東」は確かに宗教的意味を持つ方角であったと思われる。神学的な理解に立った場合、東方に向かったというのは、キリスト教の聖地に向かったことと同義となる³⁶。しかしながらより重要であるのは、バルト海、ロシア、ビザンツ、イスラーム世界という「東方」はスカンディナヴィア世界に富をもたらす世界であったことである。最初に見たように、大量のイスラーム貨幣の出土がその事実を裏付けているし、イブン・ファドラーンの記録に見える「ルーム製の錦織り」もまた、東方世界のもつ富と権威の具体的な表徴ではないだろうか³⁷。富の入手手段が略奪であれ交易であれ俸給であれ、「東方」はスカンディナヴィア人に身分の差異を視覚化させる奢侈品をもたらしたことは確かである。必ずしも物資が豊富ではなく、対外的な輸出物といえは奴隷と毛皮が中心であったスカンディナヴィア人にとって、文明世界であるビザンツやイスラームからの産品を獲得することは、自らの所属する共同体の中で彼自身の地位を高めるために有効な行為であったと考えられる。

「東方」がもたらす栄光の象徴は、いわゆるイングヴァール遠征に描写されている。イングヴァールとは、11世紀前半にスウェーデンからバルト海を超え、ヴォルガ川を遡行し、セルklandを経て、グルジアにまで達した集団を率いたスウェーデン・ヴァイキングの首領である。彼が率いる集団は、1041年、グルジア王国の内戦でグルジア王バグラト4世を支持したビザンツ帝国のヴァリャーギの構成要因としてサシレティの戦いに参加した³⁸。彼の東方行にかかわる、いわゆるイングヴァール石碑はメーラレン湖周辺を中心に30を越える。一人の人物についてこれだけ多くの石碑が残されている事例は他にない。

³⁵ キリスト教信仰との関係を明確に示す十字架の刻まれた東方石碑は、109件中64件、つまり58.1パーセントを数える。キリスト教石碑に関する近年の研究として、K. Zilmer, “Christian runic inscriptions in a dynamic context,” in: M. Stoklund (ed.), *Runes and their secrets. Studies in runology*, København 2006, pp. 437-454.

³⁶ 東方とエルサレムを並べて記録している石碑(U605)もある。

³⁷ 『ヴォルガ・ブルガール旅行記』265頁「つぎに、彼ら是一台の寝台を持って来て、それを{船}の上に置き、{さらにそこにルーム製の錦織の掛け布団数枚}と{ルーム製の}錦織の枕を{包んだ}」。ここで言う「ルーム」とはローマ、つまり当時のビザンツ帝国を指す。

³⁸ イングヴァール遠征と石碑に関しては、マッツ・G・ラーション(荒川明久訳)『悲劇のヴァイキング遠征 東方探検家イングヴァールの足跡1036-1041』(新宿書房 2004年)を参照。加えて、J. Shepard, “Yngvarr's expedition to the east and a Russian inscribed stone cross,” *Saga-Book of the Viking Society* 21 (1984-5), pp. 221-293.

それはイングヴァール遠征がスウェーデンにおいて記憶されるべき事件であり、かつまた石碑に刻むことで周囲に誇示すべき榮譽であったことを意味している。イングヴァールによる東方遠征は、スウェーデンのみならずスカンディナヴィア世界の中で長らく記憶された。1200年以前には、イングヴァール石碑からは遠く離れたアイスランドで、史実に伝説を混ぜ合わせた『イングヴァールのサガ』という作品が生み出された³⁹。

いずれにせよ、スカンディナヴィア人にとって「東方」は、富をもたらすという点で象徴的な意味を持っていた空間でありまた用語であったことは確認しておきたい。

3. スカンディナヴィア人にとってのロシア

ロシアに関するルーン石碑は11件ある。そのうち7件が古アイスランド語でロシアを指す「ガルザル」⁴⁰、3件がノヴゴロドを指す「ホルムガルザル」⁴¹、1件がビザンツ皇帝コンスタンティノス7世ポリフュリゲニトスの『帝国の統治について』でも確認できる「アイフォル」である⁴²。

まずこの11件という数値が何を意味するのかを考えてみたい。すでに見たように「東方」に関するルーン石碑は百件を越えるなか、ロシアに関する石碑は11件であり、ビザンツとの関係をしめす石碑と比べればわずかである。たしかにロシアで「富を得た」とするU219のような事例もあるが⁴³、富を得るという点ではビザンツやセルクランドのほうがはるかに重要であったと判断できる。

³⁹ 『イングヴァールのサガ』は、実際の出来事に基づく在地有力者の活躍を描いたサガであるという点では「王のサガ」に属するが、空想的内容が多数含まれているため、しばしば「伝説のサガ」に分類される。K. Wolf, “Yngvars saga viðforla,” in: P. Pulsiano (ed.), *Medieval Scandinavia. An encyclopedia*. New York 1993, p. 740. 刊本は E. Olson (ed.), *Yngvars saga viðforla jámte ett bihang om Invargsinskrifternu*. København 1912.

⁴⁰ N62, G114, Ö158, Sö130, Sö148, Sö338, U153, U209, U636.

⁴¹ G220, Sö171, U687.

⁴² G280; G. Moravcsik & R. J. H. Jenkins (eds.), Constantine Porphyrogenitus, *De administrando imperio* (Dumbarton Oaks Texts 1) . 2 ed. Washington 1967, pp. 56-62 / コーンスタンチノス・ポルプフィロゲンネートス (山口巖訳) 「帝国統治論 IV」『古代ロシア研究』15号 (1983年)、51頁「…また同様に第四の早瀬も通り過ぎる。これは大きな早瀬で、ロースの言葉でアイエフォル、またスラヴの言葉でアセートと呼ばれる。ペリカンが早瀬の岩に巣くっているからである」。

⁴³ U209: þurstein × kiarpif × tíR irenmunt × sun sin aukaubti þinsa bu × auk × aflafi × austr × i karpum / 訳：ソルステインは、息子エリンムンド (エームンド) を記念して…を買った。そしてこの農場を購入し、東方のガルザリーキで [富を] 獲得した。

それではロシアはスカンディナヴィア人にとってそれほどの意味を持たない空間であったのだろうか。二件のルーン石碑を確認してみたい。いずれもスーデルマンランドに建立された石碑である。まずはトゥーリング教会にあるトゥーリング石碑 (Sö338) であり、高さは 209 センチである。

ケティルとビョルンは父ソーステインを記念して、アーヌンドは兄弟を記念して、従士は…を記念して、ケティレイは夫を記念してこの石を建てた。兄弟たちはこの国でも海外での軍隊でも最高の人士であり、従士を抱えていた。従士の長にして最高の土地持ちでもある彼は東方ガルザルで戦没した。⁴⁴

この石碑は、ソーステインを記念して建立された石碑である。「従士の長にして最高の土地持ち」であるソーステインは、ケティルとビョルンの父であり、アーヌンドの兄弟であり、従士を抱える立場であり、ケティレイの夫であった。ソーステインは自然死ではなく、ロシア (ガルザル) で「戦没した fial i urustu」とある。もう一件をみてみたい。シェーテルスタッドにあるエスタ石碑 (Sö171) であり、高さは 160 センチである。

インギファストは、父シグヴィズを記念してこの石を建てさせた。船頭たる彼は、船仲間とともにホルムガルズで死んだ。⁴⁵

こちらはシグヴィズを記念して建立されている。彼は船舶共同体の長である「船頭」であり、その共同体を構成する「船仲間 skipari」とともにノヴゴロドで没している。これは一隻の船舶を介在とした軍隊が壊滅したということであり、それはほぼ間違いなく戦闘で死んだことを意味している。

この二つの石碑の共通点は二点ある。ひとつは記念される人物がいずれも戦死したという点であり、もう一つはやはり記念される人物が「従士の長にして最高の土地持ち」

⁴⁴ Sö338: A: • ketil : auk + biorn + þaiR + raistu + stain + þin [a] + at + þourstain : faþur + sin + anuntr + at + bruþur + sin + auk + hu [skar] laR + hifiR + iafna + ketilau at + buanta sin • bruþr uaRu þaR bistra mana : a : lanti auk : i lipi : uti : hiltu sini huskarla : ui- B: + han + fial + i + urustu + austru + i + garþum + lis + furugi + lanmana + bestr

⁴⁵ Sö171: inkifa [s] tr • l [i] t haku [a •] sta [i] n • eftiR • sihuip • faþ [u] r • sin • ha [n • fial • i h] ulm k [arþi skaiþaR uisi mi] þ • ski [ba] ra

と「船頭」という、現地の共同体の中で高い地位を得ていたという点である。この事実は、ガルザル／ノヴゴロドとは、スカンディナヴィアの在地有力者が当該地域でおこった戦闘に参加するだけの理由がある地域であったことを意味する。この二つの石碑の成立年を正確に確定することはできないが、十字架というキリスト教徒の印が入っているため、11世紀のものであると考えられる。

それでは11世紀のスカンディナヴィアとロシアとのあいだはどのような関係であったのだろうか。もっとも眼を引くのは王家同士の婚姻関係の緊密さである⁴⁶。とりわけアイスランドのサガ史料などに従えば、ヤロスラフ1世(978-1054)の第二夫人インギゲルド(イレーナ)は、スヴェーア王ウーロヴ・シェットコーヌングの娘であり、ノヴゴロド公イリヤ(-1020)の妻はデンマーク王クヌーズ大王の姉妹エストリズであり、ムスチスラフ1世(1076-1132)の妻クリスチナはスヴェーア王インゴの娘であったと伝えられる⁴⁷。他方で、ヤロスラフ1世の娘エリザベトはノルウェー王ハーラル苛烈に嫁ぎ、ムスチスラフ1世の娘マルフリードは、最初ノルウェー王シングルに嫁ぎ、その後デンマーク王エーリク2世と再婚し、別の娘インギビョルグはデンマークのクヌーズ・ラヴァールの妻となった。11世紀後半のキエフ・ルーシ王朝はすでにエトノジェネシスを経て、王朝自体はかつてほど北歐色を保持していない。しかしながらその政治地理的条件により、スカンディナヴィア世界との関係そのものは強く持ち続けていたことが、以上の婚姻政策からも理解できる。

11世紀のキエフ・ルーシ王朝においては、継承争いを含め、さまざまな戦闘の機会があったことはよく知られている。先ほどの2件のルーン石碑に見えるスカンディナヴィア人は、おそらくそうした戦闘に参加し、そして命を落としたと考えられる。どの戦闘に参加したのか確定できない以上、石碑で記念される人物とキエフ・ルーシ王朝との正確な関係はわからない。しかしながら11世紀の段階において、キエフ・ルーシは、デンマー

⁴⁶ キエフ・ルーシとスカンディナヴィアの系図の復元については、J. Forssmann, *Die Beziehungen altrussischer Fürstengeschlechter zu Westeuropa. Ein Beitrag zur Geschichte Ost- und Nordeuropas im Mittelalter*. Bern 1970 に付属する系譜資料を参照。

⁴⁷ ヤロスラフ1世賢公とスカンディナヴィア世界との関係については、H. Birnbaum, "Yaroslav's Varangian connection," in: *Studies in the early Slavic civilisation / Studien zur Frühkultur der Slaven*. München 1984, pp. 128-144; M. Hellmann, "Die Heiratspolitik Jaroslavs des Weisen," *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte* 8 (1962), pp. 7-25; S. H. Cross, "Yaroslav the Wise in Norse tradition," *Speculum* 4 (1929), pp. 177-197. ウラジーミル大公については、O. Pritsak, "The system of government under Volodimir the Great and his foreign policy," *Harvard Ukrainian Studies* 19 (1995), pp. 573-593.

ク、ノルウェー、スウェーデンの各王朝だけではなく、在地有力者という王権の下位のレベルでのつながりもまた保持していたことが確認できる。このような事実は、キエフ・ルーシの建国以来、スカンディナヴィア世界とロシア世界では、すでに考古学者たちによって明らかとされてきた経済的な関係だけではなく、政治的な側面においても、人的関係を基盤としたネットワークが築き上げられていたことを示唆しているように思われる。

もう一点興味深い石碑をみておきたい。現在はスコ修道院にある、高さ 148 センチメートルと小ぶりのシュスタ石碑 (U687) である。

ルナは、彼女とヘルゲの息子たちスプヤルボジ、スヴェイン、アンドヴェット、ラグナルを記念して、そしてシグリーズは夫スプヤルボジを記念して、この碑を作らせた。彼はホルムガルズのオーラフの教会で死んだ。エーピルがルーンを刻んだ。⁴⁸

これはルナなる女性が四人の息子を、シグリーズがその中の一人である夫スプヤルボジを記念して建立した石碑である。ルナの息子にしてシグリーズの夫であるスプヤルボジはホルムガルズつまりノヴゴロドのオーラフ教会で死んだと記録されている。ここでいうオーラフ教会とは、オットー・フォン・フリーゼンが論じたように、おそらくノルウェーのキリスト教化にとって決定的な役割を果たしたオーラヴ聖王 (995-1030) に奉献された教会である⁴⁹。このルーン石碑が 11 世紀に建立されたと理解した場合、オーラヴ聖王の死後比較的早い段階でこの教会は建設されたことになる。このような教会が建立されたという事実は、ノヴゴロドに定住する、もしくは何らかの理由で定期的に立ち寄るスカンディナヴィア人がいたことを証言していると言える⁵⁰。

⁴⁸ U687: *runa lit kiara mirki at sbialbuþa uk at suain uk at • antuit uk at raknaR suni sin uk elka uk sirip at sbualbuþa bonta sin an uaR tauþr i hulmkarþi i olafs • kriki ubiR • risti ru*

⁴⁹ ノルウェー史上最も重要な国王の一人であるオーラヴ聖王に関する歴史的研究は、実はそれほど進んでいるわけではない。S. Bagge, “Mellom kildekritik og historisk antropologi: Olav den hellige, aristokratiet og rikssamlingen,” *Historisk tidsskrift* 81 (2002), pp. 173-212. 同著者によるノルウェー初期史は、S. Bagge, “Christianization and state formation in early medieval Norway,” *Scandinavian Journal of History* 37 (2005), pp. 107-134; Id., “Eleventh century Norway: The formation of a kingdom,” in: P. Urbanczyk (ed.), *The Neighbours of Poland in the 11th Century*. Warszawa 2002, pp. 29-47.

⁵⁰ オーラヴ聖王の信仰は彼の死後、ロシアを含めた北ヨーロッパ世界に拡大した。H. Antonsson, “The cult of St. Ólafur in the eleventh century and Kievan Rus’,” *Middelalderforum* 1-2 (2003), pp. 143-160; M. Zender, “Heiligenverehrung im Hanseraum,” *Hansische*

4. おわりに

そもその記載情報量も絶対数も少ないルーン石碑からわかるロシアとの関係はそれほど多くない。しかしながらすでに見たように、ルーン石碑は、従来中心的な史料として扱われてきた叙述史料では必ずしも明らかとはならない情報もまた私たちに与えてくれる。

紀元千年前後のスカンディナヴィア人にとって、東方世界の一部であるロシアは、ビザンツほどではないにせよ、さまざまなチャンスを提供してくれる場であったことは確かである。史料の語るところにしたがえば、王朝での戦いにもスカンディナヴィア人は参加していたし、都市に独自のコミュニティを持っていたことも想定される。そのような結果は、スカンディナヴィア人は、キエフ・ルーシ国家のさまざまな社会層や社会生活に入り込んでいたことを予想させる。

キエフ・ルーシとスカンディナヴィアとの関係をめぐる研究は、ともすれば国家建設の担い手という問題に集中してきた。しかしながらルーン石碑を含めた叙述史料以外の歴史資料から明らかとなる「ささやかな」事実は、国家建設とは異なるレベルでのロシアとスカンディナヴィアという二つの異なる文化世界の交渉を証言する。9世紀から11世紀のスカンディナヴィア人もまた、そのような交渉を通じて、北西ユーラシア歴史空間の形成に参画していたことを確認しておきたい。

Geschichtsblätter 92 (1974) , pp. 1-15; B. Dickins, “The cult of St. Olave in the British Isles,” *Saga-Book of the Viking Society* 12 (1939) , pp. 53-80.

